続編。千葉県古民家訪問記。山武市（さんむし）歴史民俗資料館内、伊藤左千夫生家。
訪問日　二〇二二年五月三日。

前回書いた袖ヶ浦の「進藤家」同様、今回の「伊藤左千夫生家」も、千葉県の古民家をネット検索していて見つけた。ゴールデンウイークに千葉方面に旅行した時の目的地の一つとして取材することにした。

私は文学については専門外である。だから伊藤左千夫（一八六四　元治元年～一九一三大正二年）については『野菊の墓』しか知らなかった。以前羽村市郷土博物館内にある、「旧下田家」を取材した折、館内で中里介山の展示がされていた。中里介山がこの羽村で生まれ育ったとのことだった。あいにく私は中里介山にしても『大菩薩峠』しか知らなかったため、一応ネット上で調べてみた。そのためで今回も『野菊の墓』を読んでみる必要性を感じて、『現代日本文学大系一〇　正岡子規・伊藤左千夫・長塚節集　筑摩書房』を図書館で借りて読んでみた。一応読む前にネット上で、「野菊の墓」についても調べてみた。典型的な恋愛小説らしく、かなり気が引けてしまった。

私事ですが、若い時に『野菊の墓』を読んで感動したという元文学青年、文学少女の方々には実に恐縮な次第であるが、私は学生時代が黒歴史であり、いい思い出がない。学園モノのドラマやアニメ等で描かれている、今どきの言葉で表現される「リア充」の学生生活は、自分には無縁だった。「青春」という言葉でさえ、私には外国語である。『野菊の墓』のような情景は私には別世界だった。実際、何度読むのをやめようかと思ったが、記事を書くためには必要だからと言い聞かせながら、最後まで読み切った。伊藤左千夫は他に短歌や茶道にも通じている人であることが分かった。

伊藤左千夫の生涯について簡単に記す。氏はアララギ派の歌人であり、小説家でもある。本名は幸次郎といい、他に春園・無一塵庵主人などとも号した。江戸時代末期元治元年（一八六四）に上総国武射郡殿台村（現・山武市殿台）で伊藤良作・なつの四男として生を受けた。明治十四年（一八八一）に明治法律学校（現・明治大学）に入学するも、眼病のために中退した。その後上京して東京・横浜の乳業店で働き、同二十二年に乳牛改良社を開業した。そして同業者の伊藤並根より和歌と茶の湯を学んだ。同二十八年には桐の舎桂子に師事して万葉に関心を持った。同三十一年には新聞「日本」紙上にて正岡子規と論争、後に『歌よみに与ふる書』に感動し、同三十三年に根岸短歌会に参加した。子規の没後、同三十六年には長塚節（たかし）、蕨真らと『馬酔木（あせび）』を創刊した。そして同三十九年に『ホトトギス』に『野菊の墓』を発表し、以降『隣の嫁』『分家』等の自伝的小説を発表した。明治四十一年に『馬酔木』は廃刊、後継誌『アカネ』を三井甲之が発表したが、左千夫と甲之が対立し別れ、同年一〇月に『阿羅々木（アララギ）』を発刊、二巻以降は編集兼発行者となった。大正二年（一九一三）七月三〇日に脳溢血のために急逝した。

「伊藤左千夫生家」は山武市歴史民俗資料館内にある。ＪＲ総武線成東駅前から千葉フラ

ワーバス海岸線に乗車して「左千夫記念館前」で下車する。このバスも本数が多くないので、利用する際はホームページで要確認である。バス停前の大きな駐車場を通って一旦入館手続きをし、当館の勝山様とともに「伊藤左千夫生家」を見学する。

まず当家の概要を述べる。当家の築は約二〇〇年前、江戸後期である。伊藤家は中級の農家で五人組の組頭をつとめる豪農であった。明治十四年の家相図には長屋門があった。一八五五年当時、この辺りは上総国殿台村といい、戸数二〇軒、人口一〇〇人未満の小さな村だった。千葉県の指定史跡に認定されたのは昭和二五年（一九五〇）である。山武市殿台村（とのだいむら）にあって、江戸時代より昭和三四年（一九五九）に当主芬氏（かおる　左千夫の長兄廣太郎の息子・左千夫の甥）が亡くなるまでの間、代々居住として使用されてきた。屋根の形式は寄棟で「ひさし屋根」がついている。また格子窓の中から「下部屋」が見える。当時この家で働いていた使用人が住んでいた部屋である。屋根のカヤは三層になっており、南西隅にある出張部の部屋（便所）には杉皮が使われている。屋根の葺き替えは二〇二〇年までに二年にわたり、前半と後半に分け、県の補助金交付を受けて実施した。話によると台風や猛暑が原因でカヤの傷みが激しく、一〇年もたずに交換しているとのことだ。私がよく訪問していた白川郷や五箇山でも、あるいは他の古民家園然り、異常気象のために屋根の葺き替え頻度が多くなったこと、更に原料のカヤそのものが育ちにくくなったという説明を受けた。

この住宅にも「式台」と「せがい造り」がある。移築古民家園でしばしば出会う形式である。「式台」は駕籠に乗った客を濡れずに室内入れるために玄関とは別に作った入口のことである。「せがい造り」もまた、屋根のでっぱりを伸ばした特別な造りである。いずれも格式ある家にしか認められない。大体名主クラスの邸宅がそうである。

新緑が映える伊藤家の外観。当家の式台を外側より。山武市歴史民俗資料館の外観。

先ず、「土間」から見ていく。「土間」にはかまどがある。それ以外に側面側に「味噌部屋」、「穀入」と「下部屋」がある。ここには生活道具がしまってあった。私は今まで多くの移築

古民家を見てきたが、大体土間にはかまど以外にも往時の生活道具が置かれ、名前が書かれた紙が貼ってある。昔の生活について学ぶために見学に来る小学生たちのためである。実はこの「伊藤左千夫生家」も、コロナ前は「昔の暮らし体験」として小学校三年生が昔の暮らしを東金市や九十九里市などの近隣の町村から学習しに来ていた。その時はここにあるこれらの昔の生活道具を庭に置いたり、また「まいぎり法」という紐を使う火おこしである。然しこの体験授業もコロナの影響でなかなか実施が難しく、一昨年では一、二回ぐらいしか実施されなかった。コロナの影響はここにも及んでいた。

次の「囲炉裏」が切ってある「茶の間」は家族用の食事どころである。「次の間」と「座敷」を仕切っている木製の扉にはガラスがはめ込んである。このガラスは明治になってからつけられたものであり、当時のものである。ガラスにゆがみがあり、現代の技術では作れない、大変貴重なものである。汚れやシミもなくきれいな状態であるのに驚いた。

明治時代につけられた、貴重なゆがんだガラス。火を入れていないかまど。質素だが扉がついていて開けるのが特徴の仏壇。

「茶の間」に接して階段があって中二階の蚕部屋につながっている。この中二階の部屋は現在、改修されて板が張られている。昔の生活を学ぶために来た子供たちに見せるようにしていたが、それもやはり今はできない。山梨県や桧原村の古民家にある「兜造り」も屋根裏は養蚕のためのスペースである。この辺りには兜造りの民家はないが、昔は養蚕が盛んでけっこう行っていた。

隣の「座敷」は仏間で神棚と仏壇がある。この仏間では伊藤左千夫の命日に左千夫氏の写真を飾って「左千夫忌」を行っている。ここの仏壇の特徴は観音開きの扉で開ける式になっている。白川郷や五箇山の合掌造り民家をはじめ、浄土真宗の信仰の篤い地方では、絢爛豪華な大きな仏壇で、扉は折りたたみ式になっている。然し浄土真宗以外の仏壇でこのように観音開きで開ける仏壇は初めて見た。大体ほとんどの仏壇は扉がついてないから。当地は日蓮宗の信仰が盛んな地である。私には知識がないが日蓮宗の仏壇はこのようなものなのだろうか。

「奥ノ間」を通って「中ノ間」には槍かけがある。かつて槍がかけられてあった。伊藤家

のルーツは調べた結果戦国時代に遡れる。豊臣秀吉の関東平定時、一五九〇年（天正一八）に入ってきたといわれる。二〇一九年五月、上皇様が退位し、平成から令和に代わる一〇連休に取材した成田市の「房総のむら」内にあった武家屋敷にも槍やなぎなたが壁の上の方に掲げてあった。

その向こうは「奥の間」は書院造、床の間とつけ書院がある。隣の納戸には珍しいものがあった。一九八一年八月八日に東映で映画化された「野菊の墓」は松田聖子さんの初演作であった。その顔の部分だけをくりぬいたパネルがしまってあった。普段は資料館のわきに置き、写真撮影ができるようにしてあったのだが、コロナの影響でできなくなって、この場所にしまってある。私が小さかった頃、昭和の末期、観光地に行くと必ずゆかりのある人物等の顔を入れて写真撮影ができるパネルを結構目にした。その後平成になって自分であちこち旅行するようになったが、そういえばいつの間にか姿を消してしまった。まだあったのだ、一瞬驚いた。

後述するが、『野菊の墓』は今まで三回映画化されている。最初は白黒で一九五五年（昭和三〇）『野菊の如き君なりき』というタイトルだった。次が一九六六年（昭和四一）タイトルは前回と同じでカラー、三回目が一九八一年（昭和五六）この時は通常通り『野菊の墓』のタイトルで松田聖子さん主演だった。またドラマ化、舞台化も数回なされている。だた、現在の時世下で「身分違いの恋」というシチュエーションがなかなか描きにくいところがある。発表当時はロシア文学を参考にして制作し、作風は当時としては新鮮で、夏目漱石からもアドバイスを受けたという話もある。

この納戸では今、昔の暮らし体験として子供たちに座らせて行灯やガンドウ提灯「（別名〔ドロボウ提灯〕）というさかさまにしても灯が落ちない」を使って昔の人の生活を実体験させている。扉を閉めると本当に真っ暗になる。また「中の間」ではヒノシ体験、昔のアイロンを体験してもらう。実際に炭を入れてハンカチに実際に自分でかけてもらう。但しこの体験も目下のコロナ下では実行されていない。

納戸の隣に囲炉裏付きの茶の間があり中二階と天井が見える。この囲炉裏で出した煙によって天井を燻す。今まで取材してきた多くの古民家では、このように囲炉裏で出した煙によって屋根裏や天井を燻し、防虫のみならずカヤを強化した。各部屋にある障子は年に一度、大掃除の時に張り替える。劣化と昔の暮らし体験の時に穴が開けられたりすることがあるからだ。古民家の説明はこれで終了して、資料館の方に移った。

茶室「唯真閣」外観と「無一塵庵」の由来説明、生家の土間から撮影した次の間・座敷・中の間

資料館に行く前に、敷地内にある茶室「唯真閣」も見た。明治三十三年（一九〇〇）正岡子規が訪問し、塵一つ落ちていないと称えて「無一塵庵」という扁額を贈った。これに感動した伊藤左千夫は「無塵庵」と命名し、以来「無一塵庵主人」と号した。このことを書き記した書が展示してある。書は寒川鼠骨（さむかわそこつ）による。左千夫は正岡子規から「茶博士」と称されたほど茶道を愛好した。躍り口もきちんと設置されている。伊藤左千夫の死後、左千夫の甥・芬（かおる）を中心に、茶人のメンバーたちによって移築されたため、戦前からある貴重な建物となっている。敷地内に大きな歌碑がある。『牛飼いの　歌読むときに　世の中の　新しき歌　おほいに起こる』と記されている。また近くには前述した一九八一年の『野菊の墓』の映画ヒット祈願のため、ヒロイン役の松田聖子さんが記念植樹したにアララギがあり、名前の記された碑が建っている。当時松田聖子さんは人気絶頂期で、ファンが大勢押し寄せた。当時小学生だった私でさえも人気がすごくあることは認識していた。ファンの人だかりがすごくて圧されたということも発生した。天気が良かったこともあって、緑が映え渡っていた。

敷地内にある左千夫の歌碑。下は松田聖子さんが植えたアララギ。

この説明ののち、資料館内を巡った。伊藤左千夫に関係するものが展示されていた。中で

も前述した各時代の野菊の墓の映画ポスターは貴重だった。デビュー当時の初々しい松田聖子さんのポスターだけでなく、タイトルが「野菊の如き君なりき」になっている。タイトルが変更している理由は、戦後しばらく、「死」「墓」という言葉に対して激しい抵抗感があったのが理由だ。「野菊の墓」として映画化されたのは、件の松田聖子さんの作品である。戦争の影響が、文学作品の映画化にまで及んでいたことを示している。

※　弁解のつもりはないが、当館訪問後、度重なる転職や引っ越し等、私的に忙しく、年月だけが過ぎ去ってしまいました。コロナもようやく沈静化し、旅行や移動制限もなくなった今では、展示企画も変わっているかもしれません。悪しからずご容赦ください。

各種データー。

住所　〒二八九-一三二四　千葉県山武市殿台三四三番地

電話番号　〇四七五-八二-二八四二　ＦＡＸ　〇四七五-八二-二八四二

入館料　一般、学生一人一四〇円　団体（二〇名以上）一人一一〇円。小・中・高校生一人九〇円　団体（二〇名以上）一人六〇円。山武市民及び幼児、六五歳以上、各障害者手帳所有者は無料。

休館日　月曜日（月曜が祝祭日の場合は開館し、火曜日休館）

開館時間　午前九時から午後一六時三〇分。

アクセス　成東駅から千葉フラワーバス「海岸線」「左千夫生家前」下車すぐ。但し運行本数は多くないので事前確認必要です。